

## 第3節 マクロ経済学史

### (1) ケインズ以前の経済学

1776年にアダム・スミスの『国富論』発表から1870年代の「限界革命」までの経済学者たちは古典派と呼ばれます。この革命以後は、新古典派です。新古典派には、マーシャル・ピグー・ワラスなど、ミクロ経済学で登場する学者がいます。また、「限界革命」の「限界」自体の意味が、限界効用などミクロ経済学で扱う概念と同義でもあります。つまり、現代まで続くミクロ経済学の考え方の端緒を開いたのが新古典派というわけです。

古典派と新古典派の共通点として、セイ（セー）の法則があります。これは、生産されたものや労働供給などは、伸縮的な価格・賃金率であるために市場で調整され（必ず需要され）るという考えです。よく「供給はそれ自らの需要を生む」と端的に表現されます。ですから、例えば、恐慌が発生して失業者がいる場合、労働供給が超過している事態のため、賃金下落していきます。すると、多くの失業者を下落した賃金で雇えますから、失業問題ひいては恐慌の問題は解決すると考えられていたのです。

まとめると、「古典派・新古典派→セイの法則を重視＝供給を重視&価格調整メカニズムなど市場を信頼」となります。

### (2) ケインズの登場と「ケインズ派」の隆盛

古典派・新古典派が1929年にアメリカでの株の大暴落から始まった世界恐慌への有力な解決策を提示できない頃、ケインズは『雇用・利子および貨幣の一般理論』（1936）という著作で、古典派・新古典派の理論的な不備を指摘します。ここから、マクロ経済学が始まります。

ケインズの主張をごく簡単にここで確認すると、まず、短期的には価格や賃金率が硬直的だということになります。そして、取引量は少ないところで決まってしまうというショートサイドの原則が働くとみなしています。恐慌で考えれば、景気が悪いのに物価・賃金率が下がらず高く、需要側の基準で数量が決まってしまうということです。つまり、超過供給のままとなります。したがって、恐慌による不況は市場で解決できないと主張したいのです。

ちなみに、ここから、経済が実際の支出をとまなう需要で決する（これを有効需要の原理といいます）ことも導かれます。そのため、ケインズは政府が経済に介入し、この需要を喚起するような政策（フィiscalポリシー）や、中央銀行による裁量的な金融政策をとることを提案しました。

ケインズのこの考え方は、ヒックスによるIS-LMモデルなど理解しやすい解釈なども手伝い、多くの経済学者に受け入れられました。これがケインズ派（あるいはケインズ経済学、ケインジアン）として1960年代まで隆盛を極めることになります。

まとめると、「ケインズ派→経済は有効需要で決し、市場はいつでも伸縮的な価格調整をするとは限らないため、政府部門（政府・中央銀行など）による介入を必要とする」となります。

### (3) 反ケインズ経済学の台頭

1950年代にサミュエルソンが、非自発的失業がいる間はケインズ理論を用いて財政政策や金融政策を行い、完全雇用が達成したら新古典派理論で行うという「新古典派総合」が主張された際も、どちらかといえばケインズ派の有効性にウェイトがおかれていました。

この状況は、1960年代後半のフリードマン（『資本主義と自由』）を代表とするマネタリストの理論が登場すると変わっていきます。彼らは、新古典派理論を参考にしながら、裁量的な金融政策を

批判したり、安定的な市場においては政府介入がなくとも失業が徐々に解消すると主張したりしたのです。

次いで 1970 年代に入ると、ルーカスら合理的期待形成学派はマネタリストたちの主張を数学的に精緻化し、「徐々に」ではなく「瞬時に」解消するとまで主張しました。ここに、新古典派理論の側が「復活」し、ケインズ経済学と鋭く対立するようになったのです。この学派は「新しい古典派経済学」としばしば呼ばれます。ただ、公務員試験では、新古典派側、もっといえば古典派の系譜という理解で構いません。

#### (4) マクロ経済学史の現在

1980 年代以降のマクロ経済学は、まず、ケインズ派がマネタリストや合理的期待形成学派からの批判に応答する形で（場合によっては新古典派の考えなどを吸収して）「新しいケインズ経済学」と呼ばれる理論を構築しました。この系譜の学者はニューケインジアンと呼ばれます。これも、公務員試験では単にケインズ派の側という理解で構いません。

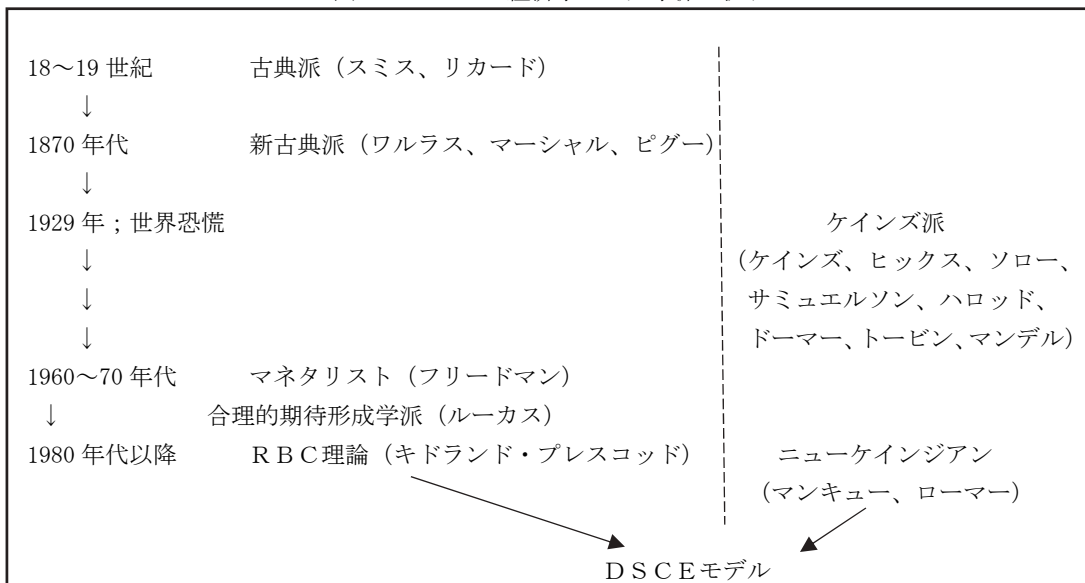
他方、新古典派は、景気循環・経済成長の研究で生まれたソロー・モデルを精緻化する実物的景気循環理論（RBC 理論）が誕生しました。

1990 年代以降は、この 2 派の「総合」を目指す動学的確率的一般均衡モデル（DSGE モデル）などが取り組まれているという理解が、公務員試験におけるマクロ経済学史となります（最新の学問動向が試験で問われるわけではないため、これ以上のマクロ経済学史の知識は不要です）。



本節では、古典派と新古典派を経済学史上の分類にしたがって分けて記述しました。ただ、公務員試験においては、この 2 つを一緒に扱っていることが多いです。したがって、本書でも他の章では、この 2 つの学派を明確に分けない記述とします。

図 1-4 マクロ経済学の 2 大学派の流れ



## 【例題 1】

国家Ⅱ種平成 16 年

A、B、Cは20世紀に活躍した経済学者に関する記述であるが、経済学者の名前との組合せとして最も妥当なのはどれか。

A. 彼は、完全雇用の水準に達するまでは、金融と財政によって経済を拡大し、完全雇用に達した後は適正な経済成長路線に誘導し、その下での経済は、自由な競争をもたらす資源の合理的配分に期待するという考えから、自らの立場を新古典派経済学とケインズ経済学の総合を図る「新古典派総合」として、主著の一つ『経済学』は近代経済学の代表的入門書として知られている。

B. マネタリズムの主唱者である彼は裁量的経済政策に反対し、経済を自由な市場に委ねるべきであり、物価安定のため貨幣量の増加率を適切な率に固定することを主張した。また、彼は自由な私企業体制の維持を主張するいわゆる新自由主義論の指導者の一人であり、福祉国家化の進行と政府の巨大化に批判的立場をとった。主著に『選択の自由』がある。

C. 制度学派の流れをくむ彼は、現代資本主義分析における問題提起で知られ、著書『ゆたかな社会』では、現代社会におけるインフレ、広告・宣伝による消費者操作たる依存効果を指摘し、また、著書『新しい産業国家』では、現代の大企業を支配しているのは経営者や技術者など種々の専門が集団たるテクノストラクチャーであることなどを主張した。ケネディ政権時代の駐インド大使を務めた経験もある。

A	B	C
1. ガルブレイス	フリードマン	レオンチェフ
2. ガルブレイス	ハイエク	サムエルソン
3. フリードマン	ハイエク	レオンチェフ
4. フリードマン	サムエルソン	ガルブレイス
5. サムエルソン	フリードマン	ガルブレイス